

# 画像が開く新しい眼科手術

## ●企画にあたって

古くから、人々は手術名人の素晴らしさを、鬼手仏心と呼んで称賛してきました。その意味するところは、外科医は残酷なほど大胆に手術をするが、それは患者を治そうとするやさしい心からであるということでした。これは現在にも通じることで、手術で最も重要なものは術者の心であることは変わりません。しかし、手術の技術やその概念は大きく変化しつつあります。

以前は、手先の器用さが手術技量の巧拙を決めると考えられていました。しかし、顕微鏡手術の導入や生体染色技術の進歩により、手術の巧拙を決めるのは、手先の器用さもさることながら、手術部位を正確に認知する力がより重要であることが理解されるようになりました。例えば、網膜領域の内境界膜剥離術は、内境界膜がはっきりとは見えなかったために、きわめて難しい手術でしたが、生体染色で内境界膜が見えるようになり、最近では簡単な手術の1つになりました。

その流れは、最近さらに加速しています。特に手術画像の進歩は、手術の対象を、より正確に認知することを可能にしています。網膜表面の手術では、対象を目で見て、その構造を頭の中で再構築して手術操作を進めますが、井上 真先生や岩瀬 剛先生が示されるように、その構造がOCT像として目の前に現れれば、手術の理解や安定性はさらに向上するでしょう。さらに、田淵仁志先生が述べられるように、人工知能が手術の画像を認識してその重要性を判断すれば、認知と判断という手術に最も重要な過程すら機械により代替可能になるのです。

本特集では、この分野における第一人者に、それぞれのテーマごとに解説をお願いしました。まだまだ発展を続けている分野ですが、手術の概念をすべて変えてしまう可能性を秘めた分野です。本特集が、この分野についての皆様の理解の一助になることを強く祈念します。

坂本泰二

鹿児島大学医学部眼科学教室